

論文

研究会主催シンポジウム抄録

「甘え」について考える

京都大学大学院教育学研究科 精神分析研究会

高澤知子・藤居尚子・村井雅美・山口昂一・國弘なつみ¹

(2016. 10. 9. 於：京都キャンパスプラザ)

シンポジスト：Jan Abram (英国精神分析協会訓練分析家、

University College London 精神分析ユニット招聘教授)

北山 修 (北山精神分析室)

岡野憲一郎 (京都大学大学院)

通訳：松本寿弥 (京都文教大学)

司会：山口昂一 (ひいらぎクリニック)・村井雅美 (医療法人 岡クリニック)

I. シンポジウム開催の経緯：Abram 先生との出会い

本シンポジウムは、京都大学精神分析研究会有志大学院生の企画により開催されたものである。英国精神分析協会精神分析家で『*The Language of Winnicott: A Dictionary of Winnicott's Use of Words* (邦訳は館直彦 (監訳)『ウィニコット用語辞典』)』の著者、そして『*Donald Winnicott Today*』の編者である Jan Abram 先生および、ウィニコットの理論に我が国で最も造詣が深く、また精神分析の日本文化におけるありように関し多くの著作を発表されている北山修先生、そして当研究会顧問であり、様々なテーマについて現代精神分析的観点から積極的に発言されている岡野憲一郎先生という 3 人の素晴らしいシンポジストをお迎えし、23 名の参加者との間で熱気あふれる議論が行われた。

この開催のきっかけは同年 8 月に京都大学にて行われた Jan Abram 先生の集中講義にある。Abram 先生は招聘教授として約 3 か月日本に滞在されたが、我々大学院生と先生の最初の接点がこの集中講義であった。3 日間にわたり Abram 先生はじつに熱心かつ丁寧に、ウィニコット理論の要点を教えて下さり、学生が遠慮なく投げかける質問に一つ一つ答えてくださった。先生の熱意や寛大さ、そして精神分析に関するご見識の深さは、我々の間にある言葉の壁など容易にすりぬけて伝わってくるものだった。また授業では先生ご自身の実践事例もお話しくくださったが、そこでは誠実でパワフルな臨床家としての姿をも見せてくださった。

¹ I、II は藤居が、III 編集作業は高澤、村井、山口、國弘、藤居が、III 翻訳は当日の松本氏の訳を参考に高澤が担当した。

さらに集中講義終了後、週 1 回、約 2 か月に渡って行われたグループ・スーパーヴィジョンは温かな雰囲気、先生は参加者ひとりひとりを尊重し、有意義なコメントを下された。

そしてオフィシャルな場以外でも、構内で会えば笑顔で「コンニチワ！」と挨拶してくださる先生のことを、学生たちは大好きになった。

ところで上記の集中講義で、Abram 先生は土居建郎先生の「甘え」理論とウィニコットの理論の関連について言及された。恥ずかしいことに、Abram 先生は我々日本人学生よりも甘え理論について深く理解をしておられるように思われた。その場に居合わせた岡野先生と Abram 先生の、治療関係の在り方をめぐるやりとりも、大変興味深いものであった。

そのような Abram 先生と我々の理解のギャップの由来を考えると、もちろんその一つは我々の勉強不足であるが、別の要因として、Abram 先生は土居とは異なる文化のなかで生きてこられた立場であるからこそ日本特有の「甘え」理論の真価が見えやすいというアドバンテージがあるように思われた。

日本で精神分析を学ぶとき、それは Freud から始まって、Klein、Winnicott、Sullivan、Kohut...と、専ら西洋の先達の眼差しを通してのものになる。「舶来もの」は尊ばれ、あつという間に日本人に取り入れられていく。一方、我々が最も身近な日本文化に根差した概念の価値を実感する機会というのはほとんどない。なぜならそのような概念は、生まれたときから空気のように存在しているものだからである。自らの環境で日頃吸っている空気がどのようなものなのかは、異なる環境の空気に身を置く経験をしないと分からない。

そうであるならば、集中講義での議論を発展させる形で、「異文化からの訪問者である Abram 先生の眼差しを通して甘え概念の意義をより深く学ぶ」という企画はどうか。この Abram 先生なら、きっとまた多くのことを我々に教えて下さるに違いない。それが本研究会開催の経緯である。

このようなあまりにも素朴な着想を後押しし、サポートしてくださったのが岡野先生であり、そして北山先生は、急なお願いにもかかわらず快くシンポジストを引き受けてくださった。さらに当日、Abram 先生の通訳を松本寿弥先生にお引き受けいただけたのは大変心強いことであった。企画当初は Abram 先生を囲んで小さな座談会でもできれば、と思っていたところが、結果的にはそれをはるかに超えた非常に豪華なプログラムでの開催がかない、関係各位に深く感謝する次第である。

II. 「甘え」とは

「甘え」は精神分析家の土居建郎が 1950 年代、米国での留学で体験したカルチャーショックをもとに、日本文化に生きる人たち特有の心性として指摘したものである。当初その概念は精神分析学界で議論されていたが、1971 年に一般書『「甘え」の構造』が出版されるとそれはベストセラーとなって、以降「甘え」は日本人の心理的特性を端的に表すキーワードとして世界に知られるようになった。

土居 (2007) によると「甘え」の原型は「母子関係における乳児の心理に存する」のであり、この観点からは甘えとは「精神の発達とともに次第に自分と母親が別々の存在であることを知覚し、しかもその別の存在である母親が自分に欠くべからざるものであることを感じて母親に密着することを求めること」であり、「人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚^{しょう}しようとする」と

定義される（もっとも本シンポジウムで北山は、土居の「甘え」の定義は不確かなものであり、そのことが論者のあいだでずっと問題とされてきたと述べているが）。さらに土居は、甘えは幼児だけのものではなく、「成人した後も、新たに人間関係が結ばれる際には少なくともその端緒^{たんちよ}において必ず甘えが発動している」と述べ、「人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割」を果たしているとする。

土居が「甘え」の概念を見出した契機の一つが、英語では「甘え」に該当する語がないことに気づいたことであつたのはあまりにも有名である。英語で「甘え」に類似する語には「dependence」と「attachment」があるが、Doi (1992/2005) によると「甘え」は、英語では別々の概念であるこの2つを橋渡しする概念である。

土居(2005)は甘え理論に関する思索を深めるうえで、英語でこの理論を紹介する機会に多く恵まれたことが大きく貢献したといい、さらに西園(1968/2005)は、森田療法の過程では問題にされてこなかった「甘え」が、精神分析では扱う対象と捉えられるのは、「東洋的思想にもとづく森田療法は、事象との同化をはかろうとする」のに対し「西欧的科学主義、すなわち要素分析的操作を特長とする精神分析では、事象を形づくる因子を分解してしまうが故」であると説明する。すなわち「甘え」は、両文化が幸運にも出会ったからこそ、その存在が見出され、深く探求され得た概念であると言えるだろう。

1967年には日本精神分析学会第13回大会でシンポジウム「甘え理論をめぐる」が開催され、土居と精神分析内外の論者との間で議論が行われた（先に引用した西園の発言も、そこに於いてのものである）。その記録は翌年の学会誌『精神分析研究』(1968/2005)に掲載されているが、そこでは各論者が土居理論の価値を確かに認めながらも、同時に未洗練の部分が多く残ることを忌憚なく指摘し、それに対して土居が反駁を試みるさまがうかがえる。

土居の「甘え」理論はその後も本研究会のシンポジストである北山や岡野を始めとする様々な他者との対話のなかで展開を続け、その軌跡は『日本語臨床3「甘え」について考える』（北山修編集代表、1999年、星和書店）に見ることができる。

土居は2009年に89歳で没したが、著書『「甘え」の構造』は、その2年前にあたる2007年には増補普及版（弘文堂）が出版されるほど、日本において一般の人々の関心を長く集め続けてきた。じつに、「甘え」は我々にとって普遍的で、かつ魅力的な響きをもつことばなのである。

Ⅲ. シンポジウム抄録

山口 本日は皆様お忙しい中、お時間を割いていただき誠にありがとうございます。英国精神分析協会の Jan Abram 先生、北山修先生、岡野憲一郎先生に本日お越しいただきました。そして松本寿弥先生に今回通訳としてお越しいただいています。そのことについて岡野先生から一言お願いします。

岡野 松本先生をご紹介します。KIPP でいろいろ通訳のお仕事もなさっています。KIPP とは京都精神分析心理療法研究所のことです。Kyoto Institute of Psychoanalysis and Psychotherapy、ですね。彼はバイリンガルなので、おそらく完璧な通訳をして下さいます。それではよろしくをお願いします。

山口 今回の会の進行についてご案内いたします。先生方に事前にお渡ししている〔我々学生からの〕質問が二つありまして、まず一つ目の質問について北山先生からレクチャーをいただきたいと思います。それに対して Abram 先生、岡野先生からのコメントをいただいた後、皆さんからの質問をお受けしたいと思っています。そのあとで二つ目の質問に移りまして、北山先生に臨床素材を提示していただき、Abram 先生、岡野先生からコメントをいただきます。最後にフロアの方からの質問の時間を取りたいと思います。では、京都大学精神分析研究会の村井に司会を渡したいと思います。

1. 「甘え」を臨床場面に生かすには

村井 それでは司会を務めさせていただきます京都大学の村井です。よろしくお願いいたします。質問は私からご紹介させていただきたいと思っています。大きく二つに分かれております。まず一つ目の「甘え概念を臨床場面に生かすにはどうすれば良いか」というご質問を提示させていただきます。甘え概念の存在を知っている日本人は多くとも、心理臨床場面で広く適用されているかという点と疑わしいように思います。恐らくそれは、日本人である我々が西洋の精神分析理論を主に学んできており、その枠組みに日本生まれの概念をどのように組み込んで良いかがわからないからなのではないでしょうか。そこで、今回の研究会において、甘え概念をウィニコットの理論と比較対照をすることを通じて両者の相違点を明確に理解し、それを臨床場面に生かすにはどうすればよいかということを考えたいと思います。以上のことから、まずは北山先生に「日本文化における甘えについて」レクチャーをしていただきたいと思います。では、北山先生、よろしくお願いいたします。

北山 はい、ありがとうございます。ウィニコットを長く読んできた者としては、大変今日は楽しみにして来ました。そして、もう一つは甘えという土居先生の提案というか概念に関して話ができることを大変喜んでいます。それで、ウィニコットと土居の甘えで、土居先生は定義をはっきりさせないことで有名だったんですね。土居先生は何度も定義をはっきりしていないことを問題にされたんですけども、土居先生は定義のはっきりしないところが大事だ、みたいなことをおっしゃったし、土居先生に従えば、何もかもが甘えになってしまうみたいな、そんなこともあって、私たちはこの定義の不確かさが大問題だと。なので、私たちは私たちに考える甘えの話と、土居先生がはっきりさせなかった問題ですね、それと私の考えるウィニコットと比較するところで興味を持っているところをご紹介します。これはですから、土居先生は何を答えるかわからないです。だから、私の関心の話をして。それで、今日は「甘え」と「はかなさ」という話をします。これは土居先生の甘えに関して随分何度も指摘されてきたことなので、私だけの発想ではないです。ただ、私の言葉で言うと、それははかなさという問題ではないかと思っています。はかなさというのは英語で言うと *transience* ですね。無常であるということ。日本語で言うところの甘え体験には、はかなさが伴うというのが私の意見です。



図 1.



図 2.

(図 1 国貞『風流十二月ノ内 皐月』) ご承知のように私は日本の母子関係に関心を持っていて、日本人の母子関係の最も日本的なところを取り出すということに関心を持ってきました。それはもちろん言葉にも表れているかもしれないけれど、こうやって絵で示すことができるところで、私はこれを活用してきました。これはご承知のとおりかもしれません。知らない人は初めて見るかもしれない。こういうのが甘え、せがんでいるとか、しがみついているとか、下にある者が上位にあるお母さんにおねだりしているとか、助けてくれとかと言っている、その他者に対する期待みたいなものを *nonverbal* に表現して、まあ言葉を使っているかもしれませんが、そしてここに共有化というのは蟹で脅かしてるっていう、実はこれはちょっとサイドラインだからまあいいにして、こういうことがあるんですね。全体は決して幸せな光景ではないですね、これはね。(図 2) それで、上下関係がなくなるっていう私の論文における指摘がありますけれども、つまり甘えが満たされると、日本人の母子関係は上下関係がなくなる。でも、普段は上と下にえらく分かれているっていう日本人の日常生活の中でだっこするとか、抱き上げるとか、おんぶするとか、そういうことで上下関係がなくなってしまうというような状態が甘えの状態だ、ということをおっしゃいました。

(図 3 菊川英山『東姿源氏合乙女』) ただし、ここから描かれた母と子の関係をご紹介します。これはサイコロジストが観察したわけでもなく、精神分析家が分析したわけでもなく、日本の芸術家たちが描き出した母子関係です。そこが非常に興味深いところですね。日本のマーケットが欲している、求めているものを描いていると言ってもいいでしょう。それで、注目しているのは、私は日本の母



図 3.

子関係は大抵ここに何か仲介する、ウィニコットの用語を使うなら **transitional object** みたいなものが必ず出てくる。私の研究では 50% 出てきます。西洋ではこれはほとんど出てきません。この間を仲介するものが出てくるんですね。(図 4 Yoko Yamada, 1987) それをずっと興味深く、元京大のやまだようこ²先生が言っておられるのは「横並びの関係」、あるいは「三項関係」とも呼んでおられます。三項関係っていうのは、母、子、**object** です。「お母さんのことを思い出してごらんなさい」



図 4.

って日本人が聞かれると、必ず **side by side** で何かを眺めているところを思い出すことが多いですね。そういうと、浮世絵の中もそうです。



図 5.



図 6.



図 7.

(図 5 歌麿『婦人相学拾翫 風車』) これを私は大好きなんです。歌麿の母子像で中に挙げられている **transitional object** とおぼしきものは風車です。それともう一つはここにウィニコットの言うところの **holding** が必ず描かれている。**holding** があってそれを仲介する **object** があると思います。(図 6 歌麿『風流七小町 雨乞』) これは日本人が好きな光景で、何度も何度もこれがよく出てくるので、日本の浮世絵の母子像の中にはこのパターンが出てきます。なぜかっていうと、**holding** といつか身体接触があって、何かを眺めている。これ、ちょっと半開きで外に開かれている、こういう姿勢はすごく日本人が好きなんだろうなと私は思っているんです。はい、これ何度も出てきます。(図 7 上村松園『母子』) これは上村松園です。上村松園は日本画の画家です。この人が描い



図 8.

² 発達心理学者

た母子像ですけど、ほとんど先ほどの絵と同じ光景ですよ。でも、この場合すばらしいのは、何を見ているのか描かれてないんですね。つまり、この絵の中心テーマとしては、**inter-dependency** というか、**holding** されているというところが描かれていて、これが日本人の好きな光景であろうというふうによく僕は論じて、日本人が考える美の体現がここにもあるかもしれないなと思っています。(図 8 上村松園『夏の宵』) 同じく上村松園です。上村松園は、先ほどの傘に空いた穴を眺めている歌麿の絵と同じ絵を描いていますね。ただし、赤ん坊が男の子から女の子に置き換えられている。でも、これは上村松園の経験がそうさせているんだろうと思うんですけども、この場合は朧月夜ですね。朧の月を描いています。



図 9.

(図 9 周延『幼稚園』) 私はずっとこれらを追いかけてきました。もちろん、日本人の文化の中に描かれている桜とか、あるいは花火だとか、そういった

ものを眺める母子像が大変多く登場します。これは何を暗示しているんだろうかということに関心を持っていました。つまり、これは **transitional** です。ウィニコットの言うところの **transitional in space** なんだけれども、**transient in time**、つまり時間がくると消えていく体験であることを象徴しているんじゃないのか、っていうのが僕の解釈です。(図 10 出典不明) これが Abram 先生、春にいらっしゃればよかったのと思うんだけど、春に咲く桜ですね。これは散るのが美しいんです。もし、桜が延々と咲き続けていたら、絶対にむかつきますよね。



図 10.

会場

(笑)

北山

つまり、ここで **beauty of transience** っていうのがある。あるいは **ephemeral beauty** っていうのがある。これを愛でている。これを私たちは共有している。これを「はかなさ」と呼んでいる。



図 11.



図 12.



図 13.

(図 11 歌麿『遊君鏡八契 水鏡』) これはもう一つ、これは水鏡、水に映った顔。これらは私たちの母子関係の **transitional** であること、いや、**transient** であることを映しているんだと私は思うんです。ここにはかなさの美学っていうのがある。**ephemeral beauty** っていうのは無常の美っていうんです。永続しない美です。美は長続きしないのが美しいんです。若いお嬢さんの美しさもそうかもしれない。言ってたね。って、そうかなあ。そう？

岡野
北山
会場
北山

いえ、そんなことないです。

そんなことない、うん。politically incorrect ですか。

(笑)

あ、そうですか (笑)。(図 12 長喜『蛍狩』) 僕、この絵好きです。これは僕の少年時代を思い出します。これは蛍ですね。こ



図 14.

こで強調されているのは、僕が外国で発表するときは、“not only

Fort/Da, but also Da/Fort. It's disappearing. They are going away.” 出てくるのも美しいけれども、ここでみんな死んでいく。僕らは知っていますよね、蛍が短命であることを。だから、母子関係が **transient** であることを映し出しているのじゃないのかということです。

(図 13 湖龍斎『雪の朝図』) これは雪うさぎ。これは2時間ほどで溶けてしまうもの。(図 14 鈴木春重『しゃぼん玉吹き図』) これもすばらしい作品だと思うんですけど、ここに消えていくシャボン玉が描かれてるんです。染みです。これは浮世絵の技法でシャボン玉が消えていくところを描いている。これ春重っていう人の作品なんですけれども。だから、日本語ではかないという表現で、私たちは「甘え」と「はかなさ」っていうのは一つの対概念として持っているのかもしれないと思うんです。実は、日本人の美しさっていうのは、はかないものを愛でるっていうのはよく言われることですけれども、私の患者さんたちがはかないっていうふうなことを嘆くことがありますけれども、私たちはこれを美しさとして経験してい

るところがある。



図 15.



図 16.

(図 15 J. B. Simeon Chardin 『シャボン玉遊び』) ところが、このシャボン玉だとかそういったものに関心を持って西洋絵画を眺めると、みんな 1 人なんです。1 人で眺めている。これは何が違うんだろうかと思うんだね。これは決してこのお母さんが冷たいんじゃないんです。このお母さんは、侵入者がいないかっていって用心深く周囲を眺めている可能性があるんですね。日本人だったら一緒に愛でるんだろうと思うけど、状況が違うんじゃないかなと思うんですけど、決してこのうちが冷たいわけではないです。(図 16 J. B. Simeon Chardin 『洗濯女』) で、ウィニコットの概念です。だから、ウィニコットの transitional object の記述には、よく読んでみると、はかなさが描かれている。消えゆく transitional object は同時に transient であるっていうことを記述していると私は読むんですよ。つまり、やがて消えていく、やがて捨てられる、やがて忘れられてしまうというような類のものを transitional object と呼んでいるのかな、そうすると transitional object というのは transient object であると。そこでもう一つウィニコットにおいてよく出てくるテーマ、disillusionment だけど、gradual であると。幻滅は成熟のためにはゆっくり進むべきである。ウィニコットが言ったように、もしそれが突然に、急激に起きると非常に外傷的になりうる、ということだと思うんですね。ここでウィニコットと私たちが会おうと思うんだけど、ここは母子関係がゆっくりと幻滅していかねばならないってことをウィニコットが強調したんだけど、この gradation に transitional object が貢献している。それともう一つはこれが急激で突然起こると、母子関係が外傷的になるというふうに思うんです。ですから、甘えというのは健康な甘えであれば特にそうですね、ゆっくりと段階的に消えていくこと、最終的に母子関係がはかなく終わることを感覚として伴っている。なので、これまでの日本の論者が、これは水田一郎先生や竹友安彦先生っていう阪大のグループですけど、甘え概念は Balint, M.その他の英国の精神分析家が言うところの partial temporary regression であると言っています。これは赤ん坊が育つうえでのストレスに対する退行です。ですからここで今、私たちは西洋

と出会っているのです。ですから、ゆっくりとした幻滅が成熟した甘えの感覚を生じさせるのです。それで日本人のもう一つの重要な美意識です。「もののあはれ」です。これは本居宣長が言っているんですけども、日本人は「もののあはれ」を強調しましたね。あらゆるものが消えていく、あらゆるものがはかない。でも、それが美しいのであると、日本人の美学にそういったものがある、それは *ephemeral beauty* であると。それで、フロイト Freud、S. の『*Vergänglichkeit*』(1916) を引用します。“Aber Ich bestritt dem pessimistischen Dichter, daß die Vergänglichkeit des Schönen eine Entwertung esselben mit sich bringe. Im Gegenteil, eine Wertsteigerung!” はかない、はかないって詩人たちはみんな騒ぐけれども、「美しいものは消えていく」って。しかし、フロイトは言うんですよ、いや、消えていくからこそ価値が高いんであると。これはフロイトの本当にすばらしい、私の好きな一節です。それですばらしい表現、「ありがとう」。「ありがとう」は感謝するときに言うことばですが、文字どおりの意味は「有難う（有ることが難しい）」。美しいでしょう？どうも「ありがとう」。

会場 (拍手)

北山 そういう話です。

村井 北山先生ありがとうございました。では、続きまして、Jan Abram 先生に討論をお願いいたします。

Abram OK、こんにちは。今日お招きいただき大変ありがとうございます。イギリス人である私が日本のことについての議論に参加できることはとても光栄です。そして、皆さんと一緒にこの概念について考えられることは光栄で、また興味深いことです。皆さんは、更なる問題を提起されたのだと思います。なぜなら西洋で発展した精神分析とここ6年間³の日本における精神分析の発展との間のギャップを皆さんは強調されているからです。土居先生の甘えという概念が日本では精神分析の発展に統合されてこなかったと皆さんはおっしゃりたいのだと思います。お伺いしたいのですが、これが事実であるというコンセンサスはあるのでしょうか。『*Japanese Contributions to Psychoanalysis*』を読ませていただいて、北山先生や岡野先生のお書きになったものは、日本の他の先生がお書きになった、クライン派の影響をより強く受けているものに比べると非常に優れています。京都に来る準備をしている時に私は土居健郎先生の著作集『*Understanding Amae*』を購入しました。彼の書いたものは理解しやすいと思います。これは大変興味深いです。まずは考えをさらに広げるために、甘えを定義づけたいと思いました。そこで今日のこの研究会のために、北山先生と岡野先生の論文と共に、土居先生の論文も読みました。甘えの概念について考えると、本当にそのようなものがそもそも存在するのかという疑問が生じました。その概念はつかみどころがない。ただ同時に、私が精神分析とか、患者と分析家の関係について思うことと響き合う気がしました。私が仕事の根本においているウィニコットの仕事に基づいて考えると、私の興味があるのは、最早期の心理的な環境であり、それは甘えの概念と関連しているように思われます。先生が

³ 後出の『*Japanese Contributions to Psychoanalysis*』（日本精神分析協会が2004年から3年ごとに発行している雑誌）の内、Vol.3 (2010), 4 (2013)のことを指していると思われる。

お示し下さった通りだと思います。皆さんのご質問は非常に複雑で刺激的なので、私が患者との初回面接で、その早期の心理的な関係性をどう応用しているのかについて、少しご説明したいと思います。患者の話を聞きながら、心に浮かぶ疑問の一つは、その患者があらのまままで愛されているという感覚を自分の中に持っているだろうかということです。初回の面接で患者から何らかの感覚を得ることは可能だと思います。その時患者がどのような困難な状況にいたとしても、そのまさに早期の関係を通して伝わってくるものが何かあると思います。しっかりとした十分な自己感があれば、患者はその分析を有効に活用できます。なぜなら、すでに象徴化して考える力を持っているからです。その特別な環境の中で、治療関係や患者の自己感が育っていきます。人生の始まりにおいて、そのような決定的要素を欠く患者に対しては、[今夏に大学院で行った] スーパーヴィジョングループの患者の多くにみられるように、分析の仕事は分析者にとってはるかに困難なものとなります。しかし、早期の環境に欠損のある患者は、分析的な環境でしか提供できない質と配慮を本当に必要としているのだということを私は言いたいと思います。甘えについて（私が理解していることから）考えると、それはナルシシズムと関連しています。土居先生は病的な甘えと健全な甘えがあると述べておられます。早期に何か良い体験をしたと思われる患者は健全な意味での甘えの感覚を得る、ということをおっしゃっているのだと思います。その一方で、（早期の心的環境に欠陥がある）ボーダーラインやより精神病的な患者は、病的な甘えを示すことになります。甘えという概念が存在するかどうかという問題に戻ると、ナルシシズム（健全でも病的でも）という観点から考えると、甘えとはナルシシズムという概念の延長線上にある概念のように思われます。そこで疑問になるのが、土居先生はどのような経緯でこの考えに興味を持つようになったのかということです。また面白いことに、土居先生は、一次愛を論じた Michael Balint の著作を引用する一方で、ウィニコットの著作にはほとんど言及していません。Balint とウィニコットは同時代の人だったにもかかわらずです。土居先生は、25 章ある著作集の中でウィニコットを 2 回だけ引用しています。土居先生とは対照的に、北山先生と岡野先生は土居先生の甘えの概念とウィニコットの錯覚、原初的没頭、移行現象といった理論との間には強い関連性があると述べておられます⁴。これには私も納得できます。そこで、土居先生がなぜこの概念を生み出したのかと考えるうちに、土居先生が自分自身を発見した精神分析的な文化について考えるようになりました。アメリカとイギリスとでは、精神分析はかなり違う発展の仕方をしましたね。私が知るところでは、北山先生はクライン派ではないイギリスの精神分析の影響を受けていらっしゃいます。ここで探究すべきことが沢山ありますから後ほどの議論が楽しみです。私が思うに、土居先生はアメリカでフロイト派精神分析に足りないものがあったことを発見した。これはウィニコットが土居先生より早い時期に、ロンドンで発展しつ

⁴ Kitayama, O. 2010 Amae and its hierarchy of love. In *Prohibition of don't look: Living through psychoanalysis and culture in Japan*, Iwasaki Gakujutsu Shuppansha, pp.68-79.

Okano, K. 2017 Passivity in Amae relationship and the fantasy of "genuine love". American Psychoanalytic Association, 86th annual meeting.

つあったクラインの理論にやはり足りないものがあつたことを発見したのと同じだと思います。私が申し上げたいのは、土居先生は、甘えという概念を導入し発展させることで、自分が訓練を受けてきた精神分析理論におけるこのギャップに対処したのだということです。それは大変日本的な概念ですが、ひいては精神分析の概念の歴史に重要な貢献をしていると思います。したがって、特にもし甘えが臨床的概念としてどのように機能するかを我々が理解することができれば、このシンポジウムはこの概念を再発見して考えるステップとなるかもしれません。同時にこれは、この概念がどのようにして臨床的なものになるのかということに関連する皆さんの質問への答えにつながると思います。甘えという概念をどのように応用できるかを考えるという問題に戻りましょう。新生児は甘えというものを受ける権利がある、というコンセンサスはここにいる私たちの中にあるのでしょうか？北山先生が(著書で)述べていらっしゃるように、甘えとは依存への要求というより「期待に応えてもらえる欲求」と呼ぶほうがふさわしいものであり、私に言わせていただければ、純粋にウィニコットのものです。北山先生がご著書の中で続けておっしゃっていることですが、甘えとは、私たちが後で議論する予定であるヒエラルキーの問題との関連において与えられるべきものを要求することです。最後にもう一点、欲求 **need** と願望 **wish** について述べたいと思います。フロイトは『夢判断』の最初の方で欲求と願望を明確に区別していますが、その概念をそれ以上発展させていません。ウィニコットがこの二つがどう違うのかということを分けて考える形へと発展させ、満たされていない欲求と単なる願望との間に明確な区別があることを明らかにしたのです。この点は臨床の場で、時に非常に重要となります。患者の欲求と、願望とを分けて考えていく必要があります。もっとも必ずしもその区別がそれほど明確とは限りませんが、ちょっと一ついいですか？Abram 先生が今おっしゃったことですが、ウィニコットに関する限り本当に感謝します。ただ、私の文章の翻訳について。甘えというのは依存心ではなく依頼心だって僕は思うんです。“**need to be met**”と英語で訳しているんですけども、合わせてもらえる欲求っていうか、期待に応えてもらえる欲求、**need** ですね、**wish** じゃなくて **need**、必要性って言ったほうがいいのか。この必要性っていうのは、**need** っていうのはウィニコットが何度も強調しているところです、彼女がおっしゃったように。それは環境が提供しないと満たされないものという意味です。

北山

村井

Abram 先生、北山先生、ありがとうございました。では、最後に岡野先生に討論いただきます。

岡野

北山先生の美しいいつもの発表に感動いたしました。Abram 先生のおっしゃったことについて、最初に一言申し上げたいんですけども、土居先生っていうのはもう亡くなった方で、大変なオーソリティであり、こんなことを言うのは問題かもしれませんが、土居先生は甘えるのがうまくなかった方だと思うんです。小此木先生と土居先生で一番の違いは、小此木先生はお弟子さんにも甘えてくるタイプですが、土居先生は決してそのようなことはなさらなかったと思います。でも、小倉清先生には本音を出されていたようです。土居先生はアメリカに行かれた時に、自分の甘えニードを満たしてくれないような環境ですごく不自由をなさつ

たと思います。そのことが関係しているのではないかと思います。それともう一つは土居先生が Balint をどうして引用して、ウィニコットを引用しなかったということに関しては、私の理解では Balint が最初に土居先生の理論を見出し、その見返りに土居先生が Balint の理論を引用したという関係だったのです。それと、臨床的にどのように応用されるかっていうことなんですけども、私は治療関係っていうのはそもそも甘えの部分があれば成り立たないと、ちょっと極端かもしれないけど思うんです。こう言うと分析プロパーの人は、「いや、そんなことないだろう、分析が成立するのは転移関係が成立することなんだ」って言うでしょうね。でも転移関係が本当の意味で扱われるためには、そこに甘えの関係があることによって、そこに許し許されるような関係があって、それで初めて自分の気持ちを表現できるっていうことがあると思うんですね。この甘えの関係と言うと、私たちは子どもが親に甘えるものと思うわけです。でも親も子どもに甘えているわけですよ。だからそういう意味では甘えは相互的なものであり、親は子どもの甘えてる姿を身代わりで体験して自分の甘えニーズを満たすということが起きています。そのようなことが実は治療関係でもあって、治療者も患者さんに対して、ちょっと甘えてる部分がなくちゃいけないし、患者さんが治療者を甘えさせるっていう部分が全然ないと、治療関係が成り立たないんじゃないかと思うんです。それと私がこの問題と平行して考えるのは、退行の問題なんですよ。で、甘えの関係っていうのは、退行した関係と言ってもいいと思うんだけど、私たちは二つのタイプの患者さんを知っていると思います。一つの種類の患者さんは、一時的にその甘えの体験をし、つまり退行する。そしてセッションが終了して帰っていく。ところが Balint の言う悪性の退行が生じてしまうと、これがずっと継続してしまい、もっともっと甘えたくなくて治療場面から帰らなくなっちゃうんですよ。ですから、私の話をまとめると、甘えの関係というのは、治療場面に応用することが可能で、その場合には治療者からの甘えというファクターも入れなくてはならないということです。それも入れないと、まずいだろうと思うし、患者の側で甘えさせる要素が、治療者を甘えさせる要素がなかったら、治療は恐らく十分なかたちでは成立しないだろうということです。そしてそれは母子関係にもつながる話だと思います。母親もおそらく成熟した形で子どもに甘える。治療者も同様の甘えを患者に対して示し、ある種の癒しを患者から受けるという部分を抜きにしては治療は考えられないでしょう。

北山 治療者に対する癒し？

岡野 治療者に対する癒しはあるでしょう。あると思います。

北山 あなたが強調している癒しって何ですか。

岡野 恐らく、自分が何らかのかたちで治療的に患者さんの助けになったということの満足感かな。

北山 それを癒した。

岡野 でも一緒にいて、患者さんと一緒にいて楽しいかもしれない。それもあっても悪くないと思う。

北山 いや、悪いと言ってませんよ（笑）。

岡野 あ、そうですか、すいません。

会場 (笑)

村井 岡野先生、ありがとうございました。何かコメントとかございますでしょうか。

北山 一つ、なかなかうまく説明できないことがここにあると思うんですよね。私の書いた英語の論文をお読みになりましたか？土居が西洋の精神分析と格闘したことについてのです。土居は訓練分析に失敗しているんですね。訓練分析を終えていないんです。これは彼のパーソナルな経験と関連したデリケートなことです。彼は2回失敗しているんです。西洋でと、それから日本でも。これはデリケートなことで、彼はこの失敗の後に自己分析を始め、その際に「分析家は自分を理解してくれなかった」「私は甘えていたな」って思ったんですよ。そうとしか私は思えない。そういうことを洞察した。

岡野 アメリカ人の分析家がそれを、甘えを理解してくれなかったということですね？

北山 そうですね。でも古澤先生⁵も理解してなかったみたいよ。

岡野 (笑)

Abram 訓練分析家に本当の問題があった、ここで言う失敗は土居先生のせいではなかった可能性があるということですか？土居先生がアメリカでは何か重要なものが得られなかったのではないかという可能性は私も感じていました。

会場 (笑)

Abram 私は土居先生の弁護をしようというわけではないのですが…

会場 (笑)

Abram しかしこれはウィニコットが取り扱おうとしていたことなのです。分析家は優越した存在ではなく、患者が何を感じているのかわからない。これについては Balint も同じことを指摘しています。なぜ分析家たちはその話を 1960 年代にしていたのでしょうか。あまりに多くの分析家たちがまるで神であるかのように、上から解釈をしていたからではないかと私は想像します。

村井 先生方、ありがとうございました。多分すごく刺激的な討論だったと思うので、せっかくですからフロアの先生方も、ぜひこの機会にご発言いただければと思います。

仲倉 ありがとうございます。仲倉です。先ほど岡野先生が甘えと退行というところで、甘えの定義を少しご説明していただいたかと思うんですけども、私がフロイトを読んでいると、その相互に甘え合うっていうと、そこがすぐに同一視とか、同一化になってしまっって、境界がなくなってしまう。同性愛転移みたいな感じで、すぐに病理的なものになってしまう。甘え合うという状態をフロイトは理解できなくて、すぐにナルシズムの問題になってしまったんじゃないか。甘えと同一化、甘えと退行というあたりは、もう少し整理して説明していただけると、ウィニコットの考え方と土居先生の考え方が見えてくるんじゃないかなと思います。先生方のご意見をお聞かせ下さい。

岡野 フロイトとフリース Fliess, W.⁶ の関係を考えると、すごく甘え合ってたと思うんです。お

⁵ 古澤平作。土居の教育分析を担当した。

⁶ フロイトが長きにわたる親交を結び学問的な交流を行った相手として知られている。

互いの自己愛を満たし合っているところがあった。でも結局うまくいかなかったわけです。そしてフロイトは実はあれは同性愛願望だったんだというふうに自分に解釈を与えたのですよね。それが彼の理解の仕方であった。でもおっしゃるとおり、甘え合うっていうことはセクシャルなものではなくて、母子関係を一時的にであれ疑似体験するっていうことだと思うんです。一時的な退行だと思うんですよね。そういう意味では恐らくみんなそれを世界中、日本の文化だけでなく、どこでも行っていて、もちろんフロイトもやっていて、でもそれをそうと同定できなかった。それは甘えという単語や概念がなかったからです。で、フロイトが唯一考えつくことができたのは、隠された同性愛願望、ということだと思うんです。

北山

分かったでしょ。分かりましたでしょ。

仲倉

いや、フロイトはそう言ったということは分かりました。

北山

でもこれ、またもう一つつけ加えるけれども、健康な母親の態度を記述するのに、ウィニコットが、**good enough** という言葉を使ったでしょう。これって、**halfway between goodness and badness** でしょ。だから、母性的没頭の一種の中間的な状態でしょう。**halfway between** です。だからこの曖昧さは、私たちは少し耐えねばならないところだと思うんですよ。甘えは同性愛とも絶対的依存とも定義できない。それは依存の部分的で **transient** な状態です。私たちがほどよく楽しんでいる限り、それでいい、それが健康なんです。ですから、健康あるいは精神的健康という概念はこの種の曖昧さを含みうるのだと思うんですよ。健康ってちょっと中途半端な状態を耐える能力にあるんじゃないでしょうか。だから極端に依存するのではなく、極端に自立してるのでもなく、ほどよく甘えながら生きている、自立しながら生きてる、これを健康なんじゃないかと。それをウィニコットは、**good enough** と呼んだ。この何かちょっと中途半端さは少し大事なことでないかと私は思うんです。

Abram

土居先生は甘えを対象関係というふうにも記述されているので、これは早期の关系到根差した発達の概念でもあることを示唆しています。そこで何が起こるかは治療関係やその他あらゆる関係において甘えがどのように表現されるかによって違ってくると思います。

岡野

一つ付け加えてもよろしいでしょうか。治療関係の話に戻るのですが、恐らく甘えを許容する、健康な意味での甘えを許容するような治療関係を持てるかどうかっていうのは、実は治療者にすごいかがかかっているように思うんです。だから治療者が甘えるっていうことをちゃんとできずにいる場合には、患者さんを甘えさせることもできない。で、甘えさせるとしたら、間違った甘えさせ方をしてしまう可能性がある。としたり、これはもうテクニックの問題ではなくて、何て言ってもいいかわからないですけど、何らかの能力が治療者の側に備わっていないとその関係は難しいんじゃないかなというふうに。

Abram

岡野先生が言われたことに一言申し上げますと、分析家としてなぜこの仕事をしているのかということを理解することが必要だと思います。このなりわいを選ぶということは、何か欲求があるからなのです。そうに違いありません。スイスの有名な分析家、**Alice Miller** は、「才能のある子どものドラマ」について、そしてそれが分析家の自己愛的な問題にどのように関係するのかについて語っています。そのような理由で、自分自身が分析を受け、自分の病的

な甘えに向き合い続けることが絶対的に重要であると言えるのではないのでしょうか。しかし最も重症の患者と関わる中でも希望はあるとも、私は思います。分析的枠組みの中で、面接室に一緒にいるということだけでも、患者と分析家双方に変化が起こることを望む気持ちがあることの極めて強力で有用な表現だと思います。分析家は、変化をもたらすために何か違ったことが起きてほしいと思っていてもいることを認識しなければならないと思います。

2. 甘えと上下関係をめぐって

村井 Abram 先生や北山先生は、甘えの関係は上下のヒエラルキーにも基づくものであると強調されています。そして、Abram 先生は京大での集中講義の際に、セラピストとクライアントの関係も人間的には平等だけれども、非対称であって、セラピストはクライアントよりパワフルな存在であるとおっしゃっていました。一方、北山先生は、受身的に対象を求めた結果、母親に抱きかかえられた乳児は母親と同じ高さに来るので、上下関係は消滅すると述べておられます。北山先生のこの見方はセラピスト、クライアント関係について、どのようなことを示唆されていると考えればよいのでしょうか。また、前述の箇所について、Abram 先生の使われた「パワフル」という言葉は、Abram 先生のご主張を最も正確に表している言葉なのだろうかという点がずっと気になっています。質問者は、Abram 先生と同様、セラピストとクライアントの関係は人間的には平等であるけれども、役割的には非対称だと考えています。しかし、その役割の非対称性はパワーの強弱に基づくものではないように感じているようです。では、セラピストとクライアントの役割の非対称性は何に基づくものなのか。あるいは、岡野先生が同じ集中講義で関係論的な立場から主張されたように、セラピストとクライアントはそもそも対称な関係なのかどうか、それらの点について先生方の意見をお伺いしたいと思います。それでは、北山先生からお願いします。

北山 ちょっと症例を引用します。その前に、これも土居先生の西洋の精神分析との戦いという論文でも言っていて、土居先生にも直接言ったことなんですけれども、土居先生自身が上から目線の人だったと私は思います。

会場 (笑)

北山 で、土居の態度は非常に oedipal father だったと。私の転移かもしれない。だから、彼は僕に対しても大変指導的で、むかつく態度。

会場 (笑)

北山 私は彼にコメントされて、もう本当に、その夜ナルシズムが傷ついて、

会場 (笑)

北山 むかついて、畳をこうやって爪立てたことがある。

会場 (笑)

北山 だから、土居さんの authoritative な attitude がクライアントの甘えを引き出すんだって。だって、あなたに対抗するには甘えるしかないじゃない、上から目線の人に下から目線で応じるしか。かわいがってもらうためには、ですよ。ということが一つあります。だから、こ

れはこの論文に織り込まれています。これを一つ強調しておきたいと思うんですね。で、もう一つ「パワフル」の問題ですけれども、私はパワフルというよりも、**maternal adaptation** とか、**environmental provision** とか、**maternal preoccupation** とか、こういうさまざまな要素で母親の仕事がウィニコットによって明らかにされていますけれども、その部分を「パワフル」と呼んでもいいんですけど、同時に私たちは、パワフルだけれども、**more significant** っていうっていいと思うんですね。**more meaningful** っていうか。それで、クライアントや、そこで外傷体験を受けた人たちは、その意味を読まねばならないっていう課題が残されてしまう、トラウマがあるということですね。そういうことをまず強調して、臨床素材です。それで、まず最初、甘えについて強調していますけれども、同時に甘えとともに、甘えがさつき脅かしとともにあるとか、甘えにはむかつくところがあるとか、「甘えてるね」って治療者が言うと、「甘えてなんかいないよ」って反抗的になるとか、そういう現象が私たちの経験していることであることも強調しておかねばならないと思いますね。それで、まず最初にこれは向いていると思って、僕はこの患者さんにモーズレイ病院で出会いました。モーズレイ病院で私が治療したケースです。この人は抑うつ状態で私のところへ来られました。彼女は、お母さんにお遊戯で踊るための衣装を縫ってもらったんですね。で、お母さんは、徹夜でお仕事なさったようですけど、その翌日、心臓発作を起こして、お母さんがこういう心臓発作を起こして以来、お母さんになかなか依存できない。私たち “**rely**” っていう言葉を使っていたんですけども、そして、私にもそのことを語ることができない。自分の責任であるという信念が強まって、明らかに彼女の抑うつ状態が強くなったんだと私は思ったんです。ところが彼女は、その責任がお母さんにあるかのように言うことができない。「あなたは、どっかでお母さんに原因がある、お母さんが心臓発作を起こしたのは私のせいじゃないというふうに言いたかったんだろうけれども、それが言えないんですね」っていうようなことを言うと、「母親に責任があるかのように言うことは、私にはとてもできないことだ」と言って、ここに **resistance** がありました。英国の女性でも恥の感情、当然ありますよね。お母さんを悪く言うことが恥ずかしいって。それで私は、「あなたはお母さんに甘えたんだけど、お母さんは全然病気だなんて知らなかった。でも、衣装を縫ってもらうことで、あなたの依存心や、そういったものを自分で認めることができなくなったんだね。そして、そういう怒りも、あるいは不満もばかな考えだというふうに思うようになったんだね」って。これ、「もし他者に依存すると」っていうところは、僕は甘えではないかと思うんですね。他者に甘えるとお母さんが死んでしまう、あるいは傷つける。あるいは、他の人が病気になったりもするなんていうことが心配なんですねって解釈しました。そうすると、彼女はこんなふうにやがて話せるようになりました。母親が元気なときにそういうことが起こったし、もう既に心臓発作、何度も繰り返していたんですね、よく話を聞くと。さらに最近では、「女の人と性関係を持ってしまうんじゃないかっていう不安が生じます」と、彼女は私に語りました。で、それは、私の考えでは甘えですよ。つまり、「女の人に甘えと、それが性関係だと誤解されるんじゃないかっていう不安があるんじゃないか」というふうな解釈をしました。これは先ほどの

岡野先生の話にもつながる。ホモセクシャルとかセクシャリティの問題として彼女たちは心配している。そして、「あなたは依存したらお母さんを殺してしまったという思いが、あなたの中には非常に罪の意識とともにあり、それを私に表現することを恥ずかしいと感じておられる」。で、外向きの恥、内なる罪みたいなことを解釈しました。そしたら彼女は、私に突然立ち上がって言いました。「私は悪くなかったんです」。「私には責任がないんです」。で、そのあと私と別れるっていうテーマが生じて、でもそれは私との別れに応じて、依存したいけれども、結局は別れねばならないんだということをかみ締めていって分離を達成されました。はい、これが一つ。ですからこれは母親とのつながりから、ゆっくりと起きるべき幻滅が、急激でトラウマティックな幻滅になった例だと。もう一つは、日本の症例です。これは、21歳の強迫神経症です。これは、お母さんがまた、要するに **sensitive** で、傷つきやすい人でした。で、患者が入院した途端に彼女は骨折をしました。骨折と患者のこれまでの行為に、実はあなたは一生懸命悩んでいるけれども、「それはあなたがやったことではない」。お母さんが勝手に転んで骨折しているんですけど、入院と同時期に骨折が起こったというので、彼は、まあ、似ていますね、さっきの彼女と。それで、お母さんに対する怒りの気持ちを少しずつ表現するようになりました。私に対しても怒るようになりましたね。で、面白いことが起きました。文化祭の実行委員長を次々引き受けるようになりました。そしたら引き受けることがあまりにも多すぎてしまって、下痢をし始めました。そうしたら、このことで恥ずかしくなって、これは言ったら恥ずかしいことになるぞと悩んでいました。私は、「あなたは引き受けすぎて下痢してるんだ」と。で、薬を出してくれって僕に言うんだけど、「それは出せない」と。「むしろ今回のことで学んだほうがいい、あんまり引き受けないほうがいいよ」って解釈しました。そしたら彼は怒りだしました。「どうして私が薬を求めているのに洞察だけ要求するんだ」って。で、ゆっくりと、でも、「あなたは、またこれも相手に期待してそれがうまくいかない、怒ったり腹を立てたり自分の責任だと感じるんですね」ということを解釈しました。そしたら、「実は先生、私は神様に対しても腹が立つんです」って言って、最初の祈祷強迫に関しての洞察を深めました。彼は心の中で祈って祈って仕方がない、これが彼の強迫神経症の症状だったんですけれども、お母さんが傷つきやすく、そしてお母さんだってやがて死んでいたり、あれだけ頼らせてくれたけれども、やがて、はかなく母子関係は終わるんだということについて洞察し、そして強迫神経症をあきらめることになりました。それで二つの共通項です。これらの人たちは、みんな生産性の高い一生懸命働く人たちです。で、この人たちの中に甘えることはいけないことだと、甘えると、とんでもないことが起きる。甘えと先生は断るし、あるいはお母さんは死ぬし、だから依存しないんだと。僕は一人でやっていくんだ、私は一人でやっていけなくちゃいけないんだって言って、強迫神経症になったり抑うつを抱えたりしています。なので、この彼らの傷ついた母親像とか、脆弱な両親像を取り扱わねばならなかったと私は思います。だから、甘えだけが問題なんじゃないということです。攻撃性や怒りも取り扱うし、急激な **disillusion** も取り扱うし、彼らの恥も取り扱うし、彼らの **resistance** や罪意識も取り扱うんです。ですから、甘えの心理だけで精

神分析は実践できないということです。ここすごく大事ですよ、甘えがなかなか使えないっていうの。でも、甘えはユニバーサルな現象で、他者への期待、依存心、依頼心として、こういうふうに取り扱うことができます。西洋から学んだ精神分析から学び、もちろん甘えというのも解釈しながら私たちの臨床は進んでいると。最後に。健康な人たちは文化や言葉の点で違ってきます。なぜなら違う言葉を話しているんですから。確実に私たちはお互いに違うんです。私たちは健康ですから。でも病理の深い人たちは、私は世界中、同じようなものではないかと思うんです。だから、私たちはお互いから学ぶことができます。文化的には私たちは違いますが、内奥ではみんな同じなんです。ですから服を脱いで裸になったら、私たちはみんな同じなんです。私はそう考えています。それで揚子江、黄河のほとりで生まれようが、琵琶湖のそばに生まれようが、私たちは同じ夢を見erると思います。

村井 ありがとうございます。では、Abram 先生、討論をお願いいたします。

Abram 治療関係を考えるときには、無意識を念頭に置く必要があります。これは岡野先生が既におっしゃっていることですが、土居先生が書いておられることを読み上げたいと思います。「患者は意識的にはいろいろな動機で精神分析を受けに来ますが、根底にある無意識的な動機には甘え、もしくは甘えの派生物があると想定して差し支えない」と。さらに続けてこう言っておられます。「分析家は初めからその甘えに焦点を当てる必要はなく、あるいは途中の段階で応じる必要もない。言い換えれば甘えを満足させるために対応する必要もない」と。「甘えがそこにあるということを心に留め、それがやがて治療関係において十分に発展していくのを待つことが大事である」と、そして「それが転移の核になる」と言っておられます。繰り返しになりますが、これは私の分析の仕事の仕方とも同じですし、私がウィニコットの考えを理解する仕方とも同じです。ブリティッシュソサイエティーの多くの同僚たちも同じです。患者の早期の心理的な関係性が、治療関係の核にあるということです。そして、北山先生に発表していただいた臨床例は、私たちのやり方と全く同じだと思います。これらの臨床例は、とても深い無意識の層と最早期の関係性の側面に関連する何かを表象しています。土居先生は、それから[先ほど読み上げた記述の後で]フロイトの有名なドラの症例を彼なりに分析し論じています。それでは次に行きますが、私が使った「パワフル」という言葉について申し上げます。実はパワフルという言葉は、8月に集中講義の中で自分が思わず言ったものです。それは治療関係について議論している中でとっさに使った言葉でした。そういうわけなので、私はこの言葉を意図的に使ったわけではないのですが使うに至った経緯をご説明したいと思います。最近私は、ウィニコットの仕事における、ある重要な二つの概念について考えています。一つは父性で、もう一つは「女性」への恐怖です。「女性」への恐怖という概念は、ウィニコットの晩年のもので、彼はあまりこの概念を発展させてはいません。簡潔に言えば、ウィニコットの「女性」への恐怖という概念は、人生の一時期、女性に完全に依存していたということを否認することに関連したものです。それは、たとえその女性に[「ほどよい母親」でないという意味で]失望させられたとしても、その女性に産んでもらったわけです。このことは、物理的な事実であると同時に心理的な事実なのです。そしてそれと同時に、フロイト

の幼少期のセクシャリティについての仕事と、André Green の二重関係 dual relationship への反論とを比較、対照していました。これは私にとっては発見だったのですが、実はウィニコットは心のマトリクスについて述べているときに、フロイトに言及しているのです。これは私の論文からの引用ですが、心のマトリクスは、母親の身体と精神から派生するものだと思います。それで、父親の役割も必要不可欠なのですが、父親の存在は、精神的なつながりを通して子どもの世話をする必要のある母親を通じてのみ子どもに伝えられるのです。これによって現実的な第三のもの、つまり父親の知覚が促進されることになるのです。そうでなければ、父親の伝達が、歪められたり、否認されたりするでしょう。そうすると、子どもに対する父親の精神的な伝達について、必然的に母親一人が、主体のプライマリーオブジェクト（一次対象）として責任を負い続けると考えられるでしょうか。そこで私にとって疑問なのが、「依存への恐怖」と等しいものだと思なされる「女性への恐怖」は、母親の精神的なパワーに対する恐れや羨望と関係があるのではないかということです。これは4月、5月、6月、7月とずっと心に浮かんでいて、8月に皆さんと勉強をする中でこの考えが形になりました。これはウィニコットが本当に言おうとしていたことであると思いますので、他の方々の見解も聞いてみたいと思います。治療関係を考えたときに、私たち治療者は、膨大なパワーを持っていますが、大切なのは治療者の立場を認識することです。パワーを持つためにではなくて、私たちもそれを別に求めてはいません（求めるべきでもありません）が、その治療者という存在が患者にとって何を意味するのかを認識しなければなりません。それが私が言おうとしていることです。もし別の言葉を見つけた人がいるなら聞いてみたいです。そこで思い出すのは、ウィニコットが晩年に「destruction」という言葉を使って言っていた「対象の使用」ということです。私は何度も彼がこの言葉を使ったことについて考えてみました。「destruction」は「パワフル」と同様に挑発的な言葉です。しかし、私はそのどちらにも代わりの言葉を見つけることができません。それはその現象を描き出すのに適切な言葉なのだと思います。

村井 ありがとうございます。では、岡野先生お願いします。

岡野 例によって短い言葉になるのですが、今年の夏に行った集中講義で、治療者と患者はシンメトリカルである、というような言い方をしたかもしれないのですが、治療関係ですごく面白いのは、患者のファンタジーの中では治療者がパワフルになってしまうということです。そして現実のパワーがあるから、パワーディファレンシャル、すなわち力の差があるから、だから搾取的なことも起こったりするわけですよ。もうこれは現実のものとしてある。それはファンタジーの中で、そして転移の中で力の差が厳然として存在するからです。でも実際にあるのは人間として平等であって、役割が異なるという関係だというわけです。つまり二人が自由連想するのは、患者の体験についての自由連想をする。そして、治療者が自分の問題を扱うのではなくて、患者の問題を扱うということにおいて役割の差があるという、そういうことだと思います。その意味では対称関係、シンメトリカルな関係ではない。でも mutual、相互的だし、mortal、つまり死ぬべき運命で、平等な人間であって、お互いに甘え合うとい

う関係だと思います。このパワーの差があるということ、そして、それは治療関係の儀式的な面であって、しかし同時に二人は死ぬべき運命にある同じ人間であるという、この二つの矛盾する関係性っていうのが面白い。治療というのは、そういう矛盾する二つの関係を併せ持っていると、両方の間に弁証法が起きるというのがアメリカの精神分析家 Irwin Hoffman の説です。ちょうど私、今 Hoffman の翻訳をされていて、彼がそういうことを言っています。

Abram 質問してよろしいでしょうか。先生がおっしゃったことすべてに同意できないわけではありませんが、一つ疑問に思ったのは、自己開示を支持する議論の根拠は技法に関係するのでしょうか。

岡野 Abram 先生が自己開示に特に関心を寄せていらっしゃることはわかります。それについては直接は答えませんが、その代わりにセラピストのパーソナルなプレゼンス、セラピストの主観性の介在を治療として用いること、すなわちセラピーを二つの主体の間の関係性としてとらえることが大切だと申し上げておきます。

村井 北山先生も何か付けくわえて下さいますか。

北山 いや、何で。母親とはパワフルなものです。それは生物学的事実だから、どうしてこれを質問するのか分からない。

会場 (笑)

北山 どうして分からない。いいですか。日本語で言葉遊びをさせて下さい。日本語で「ち」というと、「血」でしょ。「ちち」というと乳房のこと、ミルクのことをいいます。そしてお父さんのことも意味する。日本語ってすごいでしょ？で、もし、「ち」と「ち」の間に「ん」を入れると「ちんちん」、ペニスのことを意味する。「ちつ」(膣)なんていうのも言うんですよ。力の格闘のことは絡めないでおきましょう。どっちが強いかを決められるわけではない。ですから明らかに、「ち」ってね、日本人のファンタジーをすごく動かしていると思うの、だからパワフルですよ。「治療」と言うときも、最初の音は「ち」。だから「ち」はあらゆるところにある。パワフルです。その転移を僕たちは分析するわけですから。だから、このパワーは無意識であって、こんなふうに言えば笑われるだけです。私がこんな風に言えば。だから遊びの中でしか生まれない、説明できない。分かったような分からないような話ですけど、そういうものです、私の話は。治療を受けてもらうしかないですね。

村井 ありがとうございます。それでは、せっかくなのでフロアの先生方にもご質問をお願いしたいと思います。挙手していただければマイクをお届けします。

武藤 こんにちは。淀川キリスト教病院の武藤誠といいます。今日の話、全体的にわたると思うんですけど、甘えっていうものを臨床的にどんなふうに捉えるかっていうことに関して、私なりに今日のお話を聞いていると、治療者の役割っていうものを考える上で、甘えっていうラインが非常に大事なのかもしれないなというふうに思いました。私たちがセラピーをしている中で、いろんな転移というものが起こってきて、時に患者さんがこちらをずっと憎しみながらもなぜか来ているっていうことがあり得るわけけれども、そういったセラピーを支え

ている根本にあるものはどんなものかといったときに、患者さんの側から見たら一つには甘えというものがあるかもしれないし、あるいは人間というものがそもそも、人と関わると、対象と関わるというものを本能的にそういうプログラムされた中であるということがあって、関わるっていうことを求めてきているってことはあるかもしれませんが、それだけではセラピーは成り立たなくて、北山先生がお話しされてるけど、土居先生の2回の、分析がうまくいかなかったっていう話ですけれども、要は患者の提出している何かニードに応えるセラピストというものがなければ、セラピーが持ちこたえないっていうことがあって、そういったことを考えたときにセラピストの役割というものを甘えという目で見えていく。それは患者の万能感を満たすというわけじゃなくて、ニードを満たしてくっていうような意味で必要なんだっていうような見方が非常に意味があるのかなと思いました。ちょっと今日の話で思い出したのは **Herbert Rosenfeld**⁷が晩年に割と患者さんのある程度の万能感というものをこちらが受け止めていかなければ、治療自体が成り立たないっていうような考えをだんだん持つようになったっていうことをちょっと思い出します。で、**Rosenfeld** が診ていたような人はやっぱり関係の中でトラウマティックな体験をしている人を多く診てたと思うんですけど、そういう関係の中でのトラウマティックなものを持っている、本当に重い問題を抱えている患者は基本的にはある程度のニーズを細かく汲んで、別の言葉で言えば **omnipotence** になるかもしれないけれども、そういったものを細かくこちらが吟味して、応えていくっていうような様相がなければ、セラピーとして成り立たないっていうことがあり得るのかなっていうふうに思いました。ただ、**Rosenfeld** はやっぱりクライニアンには晩年にあんまり評判がよくなかったと聞いているので、そのあたり何か連想することとか何か教えてくれたらなと思います。

北山 『抱えることと解釈』っていう本がありますね、ウィニコットの中で一番ベストなタイトルだと。〔図5を示しながら〕ここでは **holding** が言語化されていませんが、この子にとってこれは相互的な関係なんです。なぜなら子もまた母親を **holding** しているからです。母親は子をだっこするために、子よりかなり大きなパワーが必要です。子のほうは物理的に母親をだっこしているわけではないのだから。ですから母親はその子を「パワフル」にだっこしているんです。ですからここで起きているのは **holding** ですが、その前面で解釈が言語的に行われています。ですから **holding** と解釈とは、同時に行われているのです。ですからここでは解釈がなされています。それは乳房とか、去勢とか、乳房切除とか、それはそこでのファンタジーによります。こちらのほうは言語化されます。でも同時にこっちで起こっていることを忘れないようにっていう、だから力が要りますよ、お母さん子ども抱えるのに、と思うんですけど。岡野さん、何か。

岡野 質問に対する答えでいいですか。じゃあ、簡単に。治療が何によって維持されるかっていうことなんだけど、愛着という側面はどうしてもあるし、依存もあるでしょう。甘えもある

⁷ イギリスの精神科医、精神分析家

わけです。そしてそれらは健全なレベルで収まっている限りは問題がないんだけど、それが問題になるのは、その依存や甘えが強迫的になったり、しがみつきのになったり、中毒症状になったり、刺激的になり過ぎる場合だと思います。ここには Balint が述べた良性の退行と悪性の退行の違いの議論が含まれますので、一言つけ加えておきます。

Abram はい、質問ありがとうございます。前に言ったことに戻りますけど、土居先生は、患者が治療に来るというのは無意識のレベルで甘えの問題を抱えているからだとおっしゃっています。すべての患者は、何か注目してほしい問題を抱えていて、それが何かよくはわからないということです。顕在的には何か理由があるのですが、無意識の部分で何を自分が求めているのかよくわかっていないのです。Haydée Faimberg というのはパリの分析家ですけど、彼女は「病理的な自己愛のコンフィギュレーション（構造）」について話をしています。彼女によると、患者は、自分に以前起こったことと違うことが起こる可能性があるかということを彼女に聞くそうです。それは患者の無意識の希望を、見事に述べているのだと思います。患者は明示的にではなく無意識的にそう言っているのです。思うのですが、分析的な状況が提供するものは、患者がそれまでに全く経験したことのない何かです。ウィニコットに言わせると、治療者は以前にうまくいったことを活用して、それを利用するのです。それから転移のパワーのために（またパワーという言葉を使いましたけど）、分析家はいろいろな落とし穴に落ちるのです。ずっと解釈し続けることもできないし、エナクトしたり、アクチュアライズしたりする。それは避けられない。しかし、分析家はいつも何が起きているのかを認識し、自分の行動ややり方を変えなければなりません。ですので、分析のセッティングですね。そのすべて、例えば面接を定期的に継続することや物理的な状況、分析家のドアの開け方や閉め方、そのすべてが継続性の一部であり、患者はそれを利用します。私も北山先生と同じ意見なのですが、このすべてが治療者が患者に提供する抱える環境になるわけです。解釈することは別のもので、その一部ですが、抱える環境とは違います。あと二つ言いたいことがあります。一つは技法についてです。それが岡野先生が今おっしゃったことに私が興味を持った理由なのです。というのも私はお気持ちはよくわかるのですが、自己開示の技法には、具体的な理由があって賛同できないのです。実際に治療者は常にあるレベルで自己開示をしています。私が言っているのは技法の一部として何かをあらわにするという非常に具体的な技法についてです。そこで Rosenfeld の話になりますが、ご存知のように彼はクライングループのメンバーでした。しかし、晩年になって、彼は自己愛的で破壊的な患者に対しては、治療者がよりポジティブになることが有益であると主張したのです。なぜならそうすることで患者の生の本能を引き出せるからだと言ったのです。それゆえ、死の本能を解釈するのは、患者の中に破壊性をよりもたらすのでやめた方がいいと彼は言ったのです。詳しい話は私がメンバーになる前のことなのでわかりませんが、おそらく北山先生は Rosenfeld がどうなったか私よりご存知だと思います。しかし、わかっていることは、彼は疎外されてしまった。それはこれらの技法の問題をめぐってのことだと思います。なぜならクライン派の技法においては、攻撃性は常に患者に向けて解釈されるべきだからです。

村井 では、ほかにご質問等などなければ、これでこの会は終わりにしたいと思います。先生方に盛大な拍手をお願いします。

会場 （拍手）

村井 どうもありがとうございました。

謝 辞

本稿の作成にあたっては公益財団法人精神分析武田こころの健康財団の研究助成を得ました。



引用文献

- Doi, T. 1992 On the concept of Amae. *Infant Mental Health Journal*, 13(1) [In Doi, T. 2005 *Understanding Amae: the Japanese concept of need-love*. Global oriental LTD.]
- 土居健郎 2007 「甘え」の構造（増補普及版） 弘文堂
- 土居健郎 2005 解説 精神分析研究選集, 2, 122.
- 西園昌久 1968 甘え理論（土居）をめぐって 精神分析研究, 14(3) [シンポジウム「甘え理論（土居）をめぐって」精神分析研究選集, 2, 96-122, 2005 年所収]
- やまだようこ 1987 ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち 新曜社